



第十六卷 第一號

(通卷第六十一號)

昭和六年一月發行

研 究

高麗尹瓘九城考

—特に英雄二州の遺址に就て—(上)

稻 葉 岩 吉

尹瓘の九城とは、高麗の睿宗即位の三四年丁亥戊子の間に於て、今の咸鏡道方面に於ける女眞を脅かし、その地に九城を創置したことを指すのであるが、九城の位置について、古來紛々の議論あり、去る大正八年中、博士池内宏氏の踏査となりて、その報告書は、わが總督府より「咸鏡南道咸興郡に於ける高麗時代の古城址」と題され、それぞれ配付されてゐる。尹瓘の九城役は、朝鮮古來の歴史上に於ける異彩を放つものに違ひない、わたくしは、かつて、尹瓘をもつて、咸鏡道の氏神であるといつたこと

がある。蓋し朝鮮の外民族と事端を醸した歴史を顧みるに、我れより進みて、敵國を侵略したといふことは甚だ稀有である。當時の政府當局者として、敢て領土慾に缺如してゐたといふのではないけれども、西方は、いふまでもなく、大國に接壤し、東南は、海をもつて限られてゐるから、用兵拓地といふことには、見込みがない。その比較的進出に容易であらうと考へられるのは、ひとり、東北方面でなければならぬのである。後節に尙ほ論及するつもりであるが、新羅の眞興王の拓疆巡狩碑が、一つも二つも、この方面より現はるゝといふことは、やがて、この民族の領土慾が、古來該方面に向けられたといふ歴史を説示するものであると思ふ。尹瓘の九城役は、決して當時に於て成功したといふのでは無い。出師の始めより、二三同僚にも危まれてゐたし、その撤退後、辛うじて聲望を保ち得た點よりしても、失敗であつたに違ひないけれども、後の東北面を策するものは、一として、尹瓘の迹を逐はんとせぬものは無い、これも、後節に述べるつもりであるが、元末明初に當り、高麗の朝廷が、いよゝゝ、咸南を、わが版圖に入れた際、その論據とするところは、専ら尹瓘の九城であり、李朝初年に於て、會寧等六鎮を設定し、その領土を豆滿江まで擴大した時にも、尹瓘の舊業は、引合ひに出されてゐる。わたくしは、これらの觀察よりして、尹瓘九城の役をば、頗る興味をもつて眺めてゐたわけであるが、困ることには、九城役は、漸次東北方に發展して、果ては、その一尖端に立つところの碑石は、豆滿江外に建てられたなどゝ、官書に明記せられるに至つた。乃ち輿地勝覽や、高麗史

のごときその特例である。かくのごときは、九城の基址が、多くは、不明であるといふことに、主因がある。基址の不明は、九城が、一年か半年にして撤去したといふことに原因し、爾後麗末に至るまで、國境外に埋没してゐたからである。九城役が、一種の物語りともなり了せたといふのも、實は、無理はあるまいと思ふが、只だわたくしは、それら物語りの間よりしても、幾何らかても史實と視らるべきものがありとしたりしたらそれを拾ひ上げて、合理的に取扱つて見たいと思ふのである。

二

高麗の睿宗は、その即位の丁亥冬より戊子の春にわたり、尹瓘をして、大兵を女眞に加へしめた、そのことは、既に週知の事實であるか、女眞用といふことは、父王肅宗の遺命であつた。肅宗は、即位の甲申春をもつて、前後二回、女眞を定州○咸南 定平 關外に脅かしてゐるが、二回とも完全に失敗した。前役は、林幹之に當り、後役は、尹瓘である。高麗史の記事は、極めて簡單であるから、何故の出兵かは判然してゐないが、之を金史○女眞人 世紀をもつて判するに、事は、曷懶甸人○咸鏡 南道 の争奪に起因してゐるらしい。肅宗の末年は、金國の勃興に際會して、女眞○金 國 人と契丹との間には、既に交戦情態が醗釀され、天祚の乾統三年○肅宗即位九年 には、阿疎といふ女眞人が、契丹のために、曷懶甸人を懷柔して、之を有利に導かんとしたことがあり、こゝに於て始めて、女眞○金 國 と高麗との交渉が開始された。世紀に曰く

穆宗^{○盈哥}十年癸未、阿疎^{○統石}自遼使其徒達紀來說曷懶^{○烈部人}甸人、曷懶甸人執之、穆宗以達紀送高麗、謂高麗

王曰、前此爲亂於汝鄙者皆此輩也、及肅海里、使韓魯罕往報捷、高麗亦使使來賀、(中略)厥後曷懶^{○諸部}、

盡欲來附、高麗聞之、不欲使來附、恐近於已而不利也、使人邀止之、斜葛^{○女真}在高麗、及往來曷懶^{○族弟}道中、具知

其事、遂使石適歡往納曷懶^{○烏}甸人、未行而穆宗沒、康宗^{○雅東}嗣、遣石適歡、以星顯統門之兵、往至乙離骨嶺、益

募兵、趨活湍水、徇地曷懶^{○甸}甸、收叛亡七城、高麗使人來告曰、事有當議者、曷懶^{○甸}甸官屬使斜勒詳穩、治刺保詳

穩往、石適歡亦使盃魯往、高麗執治刺保等而遣盃魯曰、無與爾事、於是五水之民、皆附於高麗、團練使陷者

十四人。

と、遼の目的は、曷懶甸の女真人が、未だ完全に阿什河^{○金}國の命令に服屬せず、傳統的にも、わが官爵

を受けてゐるといふ事實を捉へて、敵國^{○金}人牽掣に資せんとしたものであらうが、久しく苦惱を受け

てゐる開城政府にも同様の希望は、働き出してゐたのである。開城の高麗政府では、契丹の全盛時代

ですら、咸鏡道の女真人には、それぞれ授職し、空名ながらに、州縣を設定したこともあつたはごで

あり、機を見て、女真問題を解決せんとしてゐたことは疑はれない。それが契丹より發生したところ

の曷懶甸人争奪に、端は啓かれたのである。しかし、かゝる消息は、高麗史だけでは、一向判らない。

たゞ肅宗甲申春正月の記事に、辛巳、東女真男女一千七百五十三人來投とあるのは、まさしく、五水

之民、皆附於高麗、國棟使陷者十四人とある本文に一致する。そこで、高麗は、勢を得て、積極的用兵

に出で、一氣に女眞掃蕩を企てたのが、肅宗甲申の役であると推せられるが、その失敗の様は、世紀に、

二年^{○庚}甲申、高麗來攻、石適歡大破之、殺獲甚衆、追入其境、焚略其戍守而還。

といひ、又た

四月高麗復來攻、石適歡以五百人禦於關登水、復大破之、追入關登水、逐其殘衆踰境。

といひ、同時に

於是高麗王曰、告邊纂者、皆官屬祥舟傍都里、奇畢罕輩也、十四國練六路使人在高麗者、皆歸之、遣使來請和、遂使斜葛經正疆界、至乙離骨水、曷懶甸、活禰水、留之兩月、斜葛不能聽訟、每一事、輒至杖蔓、民頗苦之、康宗召斜葛還、而遣石適歡往、石適歡立幕府于三潺水、其嘗陰與高麗往來爲亂階者、卽正其罪、餘垂所問、康宗以爲能。

とある。本論文は、専ら、これら麗金の交渉本末を叙するのでないから、省略に従ふべきであるが、たゞ、注意すべきことは、當時女眞の使將たちが、いづれの方向より出入したかである。乃ち本文では、之を乙離骨水・曷懶甸・活禰水(遼)とあり、前掲の往至乙離骨嶺、益募兵、趨活涅水、徇地曷懶甸と一致すといつてよい。主將石適歡は、三潺水に幕府を立てゝゐたといふ、然らば、三潺水より乙離骨嶺を過ぎりて、曷懶甸に出づべきである。乙離骨嶺の、尹瓘九城の一たる蒙羅骨嶺に相當することは、

いふまでもない。

三

睿宗丁亥・戊子年の女眞用兵は、かゝる事情の下に發生した、しかし、高麗の側では、傳統的に女眞を輕視するを免れない、尤も、肅宗六七年代に、阿什河の情態は相當に理會されてゐたから、王も詔して、朕自御神器、居常小心、北交大遼、南事大宋、又有女眞、僥強于東、軍國之務、安民爲急、罷不急之役、以安斯民といひ、甲申の敗につきては、ひとしく痛憤した。睿宗が、初め、出師を議するに當りて、父王（肅宗）の誓疏を重光殿の佛龕より取り出して、之を大臣に示した、誓疏とは、佛陀の陰扶によりて、女眞を驅除し、一は疆土を拓し、一は雪辱したいといふのであるから、敵國の大勢に暗昧なる大臣たちは、曷懶旬方面の地理形勢などに頓着なく、遂に出師を開始したのであらう。尤も、尹瓘が、丁亥の冬をもつて、長春驛^{○定州}に集中した兵數は、無慮十七萬、空前の壯舉であつたに違ひない。この十七萬といふ數は、尹瓘の麾下五萬三千人、金漢忠の中軍三萬六千七百人、文冠の左軍三萬三千九百人、金德珍の右軍四萬三千八百人、之に船兵別監の船兵二千六百は、前後して進發したといふ數字に略ぼ一致し、二十萬と號したといつても無理あるまい。尹瓘は、定州大和門を、中軍は安陸戍^{○定平南興里}を、右軍は、安海・拒防兩戍^{○廣浦}の間を、左軍は、定州弘化門を、而して水師は、道麟浦^{○廣浦}を、それ／＼出發した。高麗史節要（卷七）には下の如くに、經過を叙してゐる。

十二月乙酉、……：瓘過大乃巴只村、行半日、女真見軍容甚盛、皆遁走、唯畜產布野、至文乃泥村、賊入保冬音城、瓘遣兵馬鈐轄林彥與弘正、辛精銳急攻破走之。丙申、左軍到石城下、見女真屯聚、遣譯者戴彥、諭女真曰、吾欲一戰以決勝負、何謂降邪、遂入石城拒戰、矢石如雨、兩軍不能前、瓘謂俊京曰、日吳事急、爾可與將軍李冠珍攻之、曰、僕嘗從事長州、過誤犯罪、公謂我爲壯士、請于朝宥之、今日是俊京殺身報效之秋也、遂至石城下、擐甲持楯、突入賊中、擊殺酋長數人、於是瓘麾下與左軍合擊、殊死大敗之、嘗俊京綾羅三十匹、又遣弘正(金)富弼、錄事俊陽擊伊位洞賊、逆戰久、乃克之、斬一千二百級、中軍破高史漢等三十五村、斬三百八十級、虜三百人、右軍破廣灘等三十二村、斬二百九十級、虜三百人、左軍破深昆等三十一村、斬九百五十級、瓘自大乃巴只、破三十七村、斬二千一百二十級、虜五百人、遣錄事命瑩若告捷、王喜賜瑩若職七品、命左副承旨兵部郎中沈內侍刑部員外韓儼如賜詔獎諭、瓘延寵及諸將賜物有差、瓘又分遣諸將、畫定地界、又遣日官崔資顯相地於蒙羅骨嶺下、築城廊九百五十間、號英州、火串山下、築九百十二間、號雄州、吳林金村、築七百七十四間、號福州、弓漢伊村、築六百七十間、號吉州、又創護國仁王、鎮東普濟二寺於英州城中。

この記事は、定めて尹瓘の行状などより採録したものと思はれるが、麗史收むるところの瓘の列傳には、英州以下諸城の規模について林彥が英州廳壁に題したといふ文字を收めてゐる、乃ち當時拓疆の意氣を想像し、その方位を決定すべき根本史料であるから、煩を避けず、次に收むることとする。

瓘又城英、福雄、吉、咸州及公嶮、鎮城以爲界、遣其子彥純奉表稱賀……(戊子二月)瓘又使林彥記其事書于英州廳

壁曰、

孟子曰、弱固不可以敵強、小固不可以敵大、吾諷斯言久矣、而今信之矣、女真之於國家、強弱衆寡、其勢懸殊、而窺覩邊鄙、於肅宗十年、乘隙構亂、多殺我士民、其繫縲爲奴隸者亦多矣、肅宗赫然整旅、將仗大義以

討之、惜乎厥功未集、永遺弓劍、今上嗣位、亮陰三載甫畢、祥禫、謂左右曰、女真本勾高麗之部落、聚居于蓋

馬山東、世脩貢職、被我祖宗恩澤深矣、一日背畔無道、先考深憤焉、嘗聞古人之稱大孝者、善繼其志耳、朕

今幸逢達制、肇覽國事、盍舉義旗、伐無道、一洒先君之恥、乃命守司徒中書侍郎平章事尹璠、爲行營大元

帥、知樞密院事翰林學士承旨吳延寵爲副元帥、率精兵三十萬、俾專征討、尹公事業傑然、嘗慕庾信氏之

爲人、曰、度信六月水河、以渡三軍、無他至誠而已、予亦何人哉、其至誠所感、靈威之跡、屬聞焉、吳公時之重

望、天性慎謹、臨事必三思、其良圖大策、施無不中、兩公嘗有志於此、聞命憤激、擁兵東下、出帥之日、躬擐

甲冑、未及誓衆、洒淚交頤、莫不用命、暨入賊境、三軍奮呼、一以當百、摧枯破竹、何足喻其易哉、斬首六千

餘級、載其弓矢、來降於陣前者五十千餘口、其望塵喪魄、奔走窮北、不可勝數、嗚呼女真之頑悞、不量其強

弱衆寡之勢、而自取於滅亡如是、其地方三百里、東至大海、西北介于蓋馬山、南接於于長、定二州、山川之

秀麗、土地之膏腴、可以居吾民、而本勾高麗之所有地、其古碑遺迹、尙有存焉、夫勾高麗失之於前、今上得

之於後、豈非天歟、於是新置六城、一曰鎮東軍、咸州大都督府、兵民一千九百四十八丁戶、二曰安嶺軍、英

州防禦使、兵民一千二百三十八丁戶、三曰寧海軍、雄州防禦使、兵民一千四百三十六丁戶、四曰吉州防禦

使、兵民六百八十丁戸、五曰福州防禦使、兵民六百三十二戸、六曰公嶮鎮防禦使、兵民五百三十二丁戸、選其顯達而有賢材、能堪其任者鎮撫之、詩所謂于蕃于宣、以蕃王室者也、有以見晏然高枕、無東顧之憂矣、元帥告予曰、昔唐相裴晉公出征淮西、及其平、慕容韓愈爲之碑以廣其事、故後人知憲宗絕人之德、而歌頌之、予幸從事于此、詳其本末、曷不作記使吾聖無前偉績、垂于無窮乎、彦承命援誌之、

(戊子三月)
權獻俘三百四十六口馬九十六匹牛三百餘頭、城宜州通泰平戊二鎮、與威英雄吉福州公嶮鎮爲北界九城、皆徙南界民以實之。

丁亥十二月出師より戊子三月九城を治定するまでには、かれこれ百餘日を費して、其間に女真との戦は、繰り返へされてゐる。麗史世家や麗史節要には、尙ほ照合すべき史料はあるが、それは、後節に述べた方が、好都合であると考へるから、こゝには採録せない。

四

尹瓘の九城役は、たしかに「聖朝無前之偉績」であるに違ひない、女真(金人)は、今や勃興の運に際會してはゐたけれども、その號令は、未だ完全に蓋馬山○長白山の東に及ばなだから、曷懶甸の事件をきつかけに、領土を擴張せんと企てたことは、時機であつたやうにも思はれ、瓘自らは、この役をもつて、唐の裴度のそれに擬してゐる。林彦の壁書は、格別名文ではないが、咸州以下諸城の内容を明かにし得、またこれら諸城の設定された疆域と方位とを明記したことは、極めて重視すべき價値を示

すのである。しかし、大體より視て、これら記録に對するわれらの感想をいへば、尹璣自らの行動のみが明白である割合に、他の諸軍（中軍、右軍）の経過は、さつぱり判つてゐない、就中、水師の方面は、五里霧中である。六城中の雄州は、寧海軍と稱されたから、多分水師の協力に待ちて設定されたに違ひないが、水師の行動は一切判らない。高麗史節要は、麗史とは違ひ、高麗實錄によりて編せられたものであるけれども、日次が、やゝ明瞭なだけである、特別材料は、少しも掲記されてゐない。これら遺憾の點については、既に池内博士の報告書にも言及されてゐるが、わたくしの考ふところでは、尹璣の九城は、その聲言に反して、旋ちに撤去せなければならず、撤去の體裁は、多少とり繕はれた形跡あるにせよ、失敗は、明かに失敗であり、もし睿宗の知遇なかりせば、璣の身命すらも、危かつた次第、出師當時の反對者をして、いたづらに豫言の適中を誇らしめたのであり、璣は幾もなくして世を去つた。そうした關係から、九城の記録は、朝廷に於て、十分に記録されなかつたかも知れない。開城あたりより近かく發見されたところの墓誌などによりて視ても、當時の城役に關するものは、指摘されるのである、急がずに、これら誌類を収集したら、或は、今日より以上の重要記録を發見し得るであらうと思ふ。それは、他日の事である。

しかしながら出師の當初に溯りて深く考へて見ると、政府當事者の用意といふものは、果して、どんなものであつたであらう、之が第一の問題でなければならぬ。記録が十分でないから、確言はし

かねるけれど、提供されたものの史料によりて判断するに、咸・英雄吉・福州及び公嶮鎮といふものは、悉く、當事者が豫定したものとすることは出来ないのである。池内博士の報告書により製作の地圖を見ると、尹瓘は、はじめより、咸州即ち今の咸興平野を占領し、それを確實にせんがために、その周圍に諸城を配置したといふことに會得されるのであるが、そうした廟議即ち大臣の意見なり、戰略なりは、一向に發見されないものである。しかし、博士の九城が、確定的のものでありとすれば、そうした推論は成立する、尹瓘等諸人に於ては、預め咸州を中心とし、敵人進入の隘路を杜塞せんがために兵を、それぞれに向けて進めたのであるといふ風に解釋されるのであるけれども、わたくしにはどうもそれが首肯されず、むしろ反對といつてもよい記録が拾ひ出されるのである。それは外ではない、尹瓘列傳の首めに、下の文字がある、

女眞本鞋鞬遺種、隋唐間爲勾高麗所並、後聚落散居山澤、未有統一、其在定州○定平北朔州○朔平北近境者、雖或内附、乍臣乍叛、及盈哥○穆宗烏雅東○康宗相繼爲會長、頗得衆心、其勢漸橫、伊位界上、有連山、自東海岸崛起、至我北鄙、險絕荒翳、人馬不得度、間有一徑、謂瓶項、言其出入一穴而已、邀功者、往往獻議、塞其徑、則狄人路絕、請出師平之。

この記事は、極めて大切であるから、麗史節要是、之を丁亥十月壬寅の條、以將伐女眞、御順天館○平壤南門閱兵、分賜銀布酒食の次に書き下ろされてゐる。わたくしが、出師の當初の用意を問ひ、深く

考ふるの要ありとなすのは、この記録が、最初に提示されてゐるところの麗史節要の書法である。わたくしの臆斷をいはしむれば、麗史節要の編者は、この記事をもつて、睿宗の君臣が、出兵に決意した最大動機であると解したに違ひない。もとより、それは尹瓘の誌狀といつたものに因つたものであらうが、廟議は、輕々しく、邊臣の諜言を信じ、伊位界の瓶項を杜塞せば、女眞の通路は、完全斷絶し得るものとした。伊位界の瓶項以外に、何程の侵入路あるかは、想像してゐない。瓶項はたゞの一穴である、恰も一丸の泥をもつて函谷關を封すべしといつた工合、敵の虛を衝かは、功は容易に收め得べしとし、諜言を基礎として、出師したものと信せられる。

この想像は、いろいろの方面より立證されるのであるが、五軍の總兵約十七萬中、瓘は、麾下五萬三千人、左軍文冠の兵三萬三千九百人、合計八萬六千九百といふ半數に近かい大兵をもつて、路を分けて進み、石城の下にて兩軍と相合し、やがて伊位洞コルを襲破した、乃ち知る主力軍は、五路のいづれでも無い、専ら伊位方面に向けられたのであることを。英州城は、やがて洞コルの附近、瓶項の手前に設けられたことは、前後の記事で明白であるが、出發以來約半月を費したものであることも、注意すべきであらう。兵馬鈐轄林彦の題壁も一見不思議である。九城の中城即ち大都督府は、威州威州であつたから、その城の廳壁に書かしむべきが、むしろ至當であるらしく思はるゝに、さはせずして、之を英州城廳の壁に認めて、その功業を不朽に傳へしめんとした、英州の基址は、伊位洞コルである、彼は、

その出師の當初に於て、この地を占領して、瓶頂の要路を杜塞せんことをもつて、戰略の眼目であるとした、今や、彼れは、その目的を貫徹したのである。林彦に従へば、句高麗の古碑遺跡は、尙ほ諸將軍の眼前に映してゐるといふ、記念の文字をそこに遺留することは、唐相裴度のご事に依らずもがな、權の英州題壁は、非常の誇りであり、また、この戰事の目的の全體としたものであることを信じたい。肅宗の誓疏に見ゆるところの寺刹の創建も、ひとり、英州城内に於て、仁王・普濟の二寺となりて現はれてゐる。

五

伊位洞（戊子）占領後の尹權は、さらに瓶頂に向けて兵を進めそこに女眞兵と衝突した。麗史節要に曰く

乙丑（正月）尹權・吳延寵率精兵八千出加漢村瓶頂小路。賊設伏叢薄間候。權軍至急擊之。軍卒皆潰。唯餘十餘人。（女眞）

賊圍權等數重。延寵中流矢勢甚危急。拓俊京率勇士十餘人將救之。其弟郎將俊臣止之。曰、賊陣牢不可破。徒死無益。俊京曰、而可歸養老父。我以身許國。義不可止。乃大呼突陣。擊殺十餘人。崔弘正・李冠珍等、自山谷引兵來救。賊乃解圍而走。追斬三十六級。權等以日晚還入英州城。權泣涕執俊京手曰、自今我當視汝猶子。汝當視我猶父。承制授閤門祇候。

丙子（正月）女眞男女一千四百六十餘人、又降于左軍。丁丑賊步騎二萬來屯英州城南。大呼挑戰。權與林彦曰、彼

衆我寡、勢不可敵。但當固守而已。俊京曰、若不出戰、敵兵日增。城中糧盡、外援不至。將若之何。前日之捷、諸

公不見、今日亦以死力戰、清諸公登城觀之、乃率敢死之士、出城與戰、斬十九級、賊敗恤奔北、倭京鼓笛凱還、瓘等下樓迎之、携手交拜、瓘延寵乃率諸將、會于中城、大都督府、權知承宣王宇之、自公險城、領兵詣都督府、(智顯)卒遇虜酋史現、與之戰、失利、喪所乘馬、倭京即引頭卒往救敗之、取虜介馬以還。

と。瓶項小路を越えて敵地に深入せんとした尹瓘の兵は、失敗に終はり、英州城は、直ちに敵の包圍を受けたことは、これで明かである、瓘は、やがて、守備兵をその地に残して、自らは、咸州の中城大都督府に引き上げ、英州城は、ひきつゞき女眞に襲はれてゐたといふのであるが、當初の意氣ごみに照し合はずと、辻褃が合つてゐない。尹瓘とても、英州城の築城をもつて敵勢を杜塞し得べしとは今は考へてゐず、さればとて、瓶項口を杜絶することも、不可能であつた。林彦の題壁は、こゝに於てかいたつらに誇張の文字を列べたに過ぎないといふことになるのであらうが、わたくしの見るところでは、尹瓘のこの進退は、戦局の進むにつれて、新たに展開された形勢に據くされたものである、乃ち英州城といふ不便なところに居ることを許さず、交通の便多き中城都督府に引上ぐることにした、形勢の展開とは外でない、それは、雄州方面の戦局であると思ふ。高麗史節要には、左の重要な記事がある。

己丑五月、集群臣於宣政殿、問以還女眞九城可否、初議者皆言、女眞弓漢里外連山壁立、唯有一小徑可通、(伊位界)若設關城塞小徑、則其患永絶、及其攻取、水陸道路、無往不通、與前所聞絶異、女眞既失窟穴、誓欲報復、乃引

遠地群酋、連歲來攻、詭謀兵械、無所不至、以城險固、不能猝拔、然當戰守、我兵喪失者亦多、且拓地大廣、九城相距遼遠、谿洞荒深、賊設伏抄掠、往來者數矣、國家調兵多端、中外騷擾、加以饑饉疾疫、怨咨遂興、女眞厭苦、亦遣使請和、乞還舊地、群臣議多異同、王猶豫未決(下略)。

前節に於て、わたくしは、尹瓘義略は、伊位洞^{コル}方面の攻取に外ならない、故に、英州築城は、出師の目的の全體であると反覆して置いたのであるが、今この記事によるに、「及其攻取、水陸道路、無往不通與前所聞絶異」と書いてある。本文は尹瓘列傳より採録したことゝ解してよい。そのいづれにせよ、尹瓘たちは、専ら謀言を信じ、女眞の來路は、瓶口杜塞で解決し得べしとしたのであるが、それは、全然失敗に終はつた。中軍の金漢忠と右軍の金德珍の行軍路及び水師の方面が、皆よく判らないから、致方ないけれども、雄州及び吉州・公嶮鎮方面は、これら水陸兩軍の力によつたことは、首肯すべく、それら地點を綜合すれば、拓地大廣、九城相距遼遠である。池内博士の報告は、咸興の北六(韓界)十里の加平古城を指して、英州となし「瓘自ら征略に従事したる方面に於て、水陸道路往きて通せざるなしといふ特別條件に適する地は、狹義の咸興平野の北端、黒林江と城川江との會流點なる五老里附近を措きて他に之を求むべからず」とされてゐるが、この解釋は、全くの讀違ひであらう、及其攻取、水陸道路云々であるのは、九城の全體を通じての解釋であり、ひとり、英州一城の地理的説明では無い。

恰も、當時の女眞兵は、英州城を陥れること必しも可能でないといふことも判かり、雄吉二州方面の守備は、却て手薄であると知れたから、鉾を轉じて、この方面に向けられたのであるまいかと思はれるが、形勢のかく轉換したる以上、主將の帷幄は、自ら咸興のごとき中城に移置して、全體を總轄するの便を利用せなければならぬ。さてこそ尹瓘は、不満ながらに、英州を後にして、咸興に引き上げたのである。

六

咸・英・雄・吉・福州及び公嶮鎮の各地中で、首の咸州をもつて、今の咸興に擬定することは、麗史地理志の首倡であり、尤も無難らしく思はるゝが、しかし、之とて確證のあるといふのでは無い。金の後を受けた元は、合蘭府をそこに置いた、合蘭の名は、合懶（曷懶）に基づき、之が、その路の治所としたから、金代でも、定めて重要地點であつた、高麗の咸州は、そこでなければならぬといふだけである。わたくしも、この推論に異議はないが、たゞ、尹瓘の當時、この地點の何たりしかは、問題であらう。東國輿地勝覽（四八）咸興府山川の條に、大白赤山・小白赤山といふのがあり、府北一百二十三里、二山之を望みて皆な白し、故に諺に白赤といふと稱すとある、白赤は、山色に因むといふ説明は、當りそうにもないが、大東輿圖によるに、大小白赤川ありて、白赤山の方向より府北を經し、城川江に合流するから、いづれにしても、尹瓘の徇へたところの大乃巴只は、この流域に位するに違ひない、

肅宗辛巳の歲二月の條を見ると、東女眞乃巴只村歸德將軍甫羅の入朝があり、權の戦功にも、首に、この村名を擧げてゐる。わたくしは、大乃巴只村をもつて、今の威興に擬するのである。やゝ想像に過ぐるの嫌ひはあるが、尹權は、大乃巴只村を徇へて、そこに威州大都督府を設定した、乃巴只といふ名稱は、女眞語彙より求むべきであるかも知れず、もしそれが判明すれば、一層搜索の便はあるであらう。かくて、尹權の麾下は、威興の大乃巴只村を徇へてより、一路、伊位洞コルの方向にと進發した。伊位洞コルとは外ではない、即ち草黃嶺下の草芳院が、それである。わたくしは、かく推定したい。草黃嶺上より移置された新羅眞興王巡狩碑の、草坊院に、今も儼在することは、週知の事實である。

右の推定を證せんがため、今一度前に述べたところの當時○尹權出師の初めの女眞の使將たちが、いづれの方
向より出入したかである、乃ち本文では、之を乙離骨水―曷懶甸とあり、主將石適歡は、三潺水に幕
府を立てゝゐた、然らば、三潺水より乙離骨を過ぎりて、曷懶甸に出づべきである、乙離首嶺の蒙羅
首たるは、こゝにいふまでもない」と述べた一節を、くり返へすことを許容されたいのである。この
解釋については、誰しも異論あるべきでないと思ふのであるが、然らばその三潺水とは、いづれで
あらう、わたくしは、丁若鏞が大韓疆域考(六)北路沿革考に述ぶるところの、三水郡○平安北道方面をも
つて、之に充つることを至當としたい。三潺水といふ名稱に、地理的説明の加へられてゐるのは、金史
本紀、天會九年 命以徒門水○豆滿江以西渾曠・星顯・僞蠡三水以北開田、給曷懶路諸謀克といふ記事であら

うが、既に徒門水以西であるから、甲山・三水の地方に、之を求めなければならず、勝覽（四九）三水の條に、自甲山府西北、距二日程、經由棧道、如李方洞、積生洞、申元節洞、五敢德、虛空橋、黔隱、遲達等處、無一步平地、有三大水、一出白頭山下馬竹洞、經惠山鎮、暨仁遮外、與崔天已洞水合流入郡界、一出吉城縣北長白山西北堡、經雲龍堡、與虛川江合、至江岐入郡界、一咸興府黃草嶺、赴戰嶺、平安道江界府五萬嶺等水合百魚面江入郡界、三水合流入鴨綠江、故曰三水（云々）とあるのが、渾曠・星題及び倭春の三水に相當することは疑はれない、たゞ右の三水中のいつれが倭春水に當るべきやは、判らないけれども、高麗に近距離にして而も交通の便多きもの求むれば、最後の魚面江流域であらうと思ふ、魚面江即ち今の長津江は、中途にて、赴戰江を合してゐるが、古來の通路は、もとより今の長津を經由したもので、赴戰嶺は間道であるから、自然、高麗時代の交通は、草黃嶺方面に赴き、中嶺より吾老堡に出て、やがてわたくしのいふところの大乃巴只即ち咸興に出てたものに違ひあるまい。滿洲歴史地理（第貳卷）滿洲に於ける金の疆域中、松井氏の「さて徒門水は、今の豆滿江なり、渾曠水は、渾蓋水とも歡春水ともいひ、明かに今日の琿春河なり、倭蓋水は、禪春水とも、蟬春水といはれ、恐らくは、今の嘎呀河（又は艾河・噶哈哩河）のことなるべし。星題水はもとほ、速頻路に屬したることもありて、禪春水と同じく長白山に近き河なりといへば、恐らくは豆滿江の一支なる布爾哈特河のことならむ、倭蓋星題二河の位置につきては、なほ能く考ふべき所なれど、要するにこの二河と、前の渾曠河とは、共に、今の豆

滿江北の大河なること疑なく、要するに、豆滿江の河孟は、殆んど皆合頼路の域に屬したりと認めて可なり」と解せられたのは、甚しき錯誤である。尤も松井氏も、「なほ能く考ふべき所なれど」と斷はつてゐられるより見れば、必しも定説とすべきではあるまい。

既に、前節に述べたるごとく、高麗の君臣は、諜者の言による女眞の交通路に當りては、瓶項と名けられたる小徑のあること、及びそれが伊位界上の連山に在るを知り、それを杜塞せんことを企てたのであるが、この想定にして誤りなくば、伊位と稱する地點は、他に求むべきでない、即ち咸興より城川江枝流を溯りて、五老里に出て、五六里にして中嶺鎮(眞興里)を越え、急阪二里許、草黃嶺に到達するのである。わたくしは、この嶺の小徑をもつて瓶項に擬し、草芳院をもつて、伊位洞コルに比定する。尹瓘の英州城は、そこに置かれたのであつた。草坊院と嶺とは、かく、目睫の間に近接してゐたのであるから、瓘等が兵を瓶項に進めて失敗し、その日をもつて歸城したといふに吻合す。池内博士にも、この點は苦心せられたと見え「故に伊位といひ瓶項といふ地は、赴戰嶺若くは黃草嶺の邊に之を求むべきがごとし。されども、五老里○博士の擬定
しるた英州より赴戰嶺へは約十二邦里、黃草嶺へは約八邦里にして、高陽里に於ける石城の戰の後、先づ將士を發遣し、又た東興里に於ける英州築城の後、一日内に進出して歸陣したる地としては、共に其の距離遠きに過ぎ、地理上の記載と史上の事實とは互に相容れざるものあり」云々となし、瓶項の「記事は殆んど價值なし」と斷じてゐられるが、それは、五老

里をもつて英州に擬定したからである。博士は、九城の役をもつて「攻伐と築城とを合せて一ヶ月半以内」に一段落を告げたる瓘の経略は、決して遠き地方に及べる理なし」と斷じてゐられるが、瓘の築城については、節要、戊子年二月の條に、尹瓘以平定女眞新築六城、奉表稱賀、使都鈐轄左副承宣禮部郎中林彥、作記頌功、掛于英州南廳、又立碑于公嶮鎮以百界至とありて、六城の城役は、出征後六十日に垂んとして始めて完了した、一ヶ月半で、攻伐も築城も一段落を告げたといふ記事は見當らない。博士の「伊位洞の地を瓶項と稱せし事情」は、傳聞の誤りに歸してゐるけれども、接壤地のことでもあり、一概に誤聞をもつて葬り去るべきではなからう、「されば所謂瓶項は、五老里附近の伊位洞(村)及び加漢村に對する高麗人の稱」云々は、すべて、五老里英州説より發生する見解である。